

上野発 桃源郷行き

夜に吸い込まれていく東京の街は、きらびやかな反面、どこか寂しさが漂っている。ビルの谷間を歩く人々は、互いの存在を気にすることもなくただすれ違い、足早にどこかへ消えていく。

街角ですれ違った中年のサラリーマンは、一週間の疲れを肩に背負い、重々しげに家路をたどる。唯一、若者達だけは、週末の解放感を満喫し、はしゃぎ回っている。

路地を歩いてきた健太は、やがて日比谷通りに出た。通りから見渡す夜空は、ビルの屋上にそびえるネオン板の輝きに遮られ、ほとんど星は見えない。ただ、ぼんやりとした少し不気味な明るさだけが、上空を覆っている。街並みの風景は、

ショーウィンドウの明るさで華やいだ色に映るけれど、どこか怪しい雰囲気を感じ出してのように感じる。

健太は今、毎夜見なれたこの風景が、すべて夢幻であったような錯覚を味わっている。

週末の日比谷通りは、さすがに平日ほどではないけれど、通り過ぎる車のヘッドライトが眩しい。視線を逸らすように下を向き、今日二箱目のキャスターマイルドの封を切り、タバコを取り出し火をつけた。

先程まで、会社近くの小料理屋で同僚と飲んだ酒を醒ますため、白いペンキのはげかけたガードレールに寄りかかりながら、タバコを思いっきり吸った。

夢幻のような都会の情景を眺めていた健太は、両肩から力を抜き、大きなため息をついた。

（この街に来て何年たったんだろう）

そんな問いかけが、心の中から強く湧き出してきた。

東北の片田舎で高校を卒業し、地元の会社に就職した健太だったが、上司とそりが合わず、社内でトラブルを起こしてしまい、自ら責任を取り会社に辞表を提出した。

しかし、その会社は、父親が知人を頼りに何とか頭を下げて入社させてもらったようなもので、父親がどこで知ったかは別として、帰宅した健太を見るなり何も言わず、ほほに数発平手を打ってきた。

健太自身、あの時の痛みは今でも忘れない。いや、忘れられないのだ。ただ、当時の健太は、父の思いなどわかるはずもなく、父と激しく口論をしたあげく、気まずさを引きずったまま東京へとやってきた。

しかし、東京には来たけれど、特にこれといった資格や特技があるわけでもないため、職を転々とした。都会での厳しさを感じ始めた二十歳の時、今の京成物産に中途採用されたのであった。

(そうか、あれから十八年も過ぎたのか)

時の長さをしみじみと感じながら、未だどんよりとした空を眺めている。

今では、人並みに嫁をもらい、子供も二人と、ごく普通のどこにでもいる家庭人になっている。

革靴の底にタバコを押し付け、吸いガラをポケットにしまい込み、いつものようにＪＲ神田駅に向かって歩き始めた。

京成物産に採用された十八年前、健太は見知らぬ街にいる気軽さと中途採用というハンデを克服するため、がむしゃらにがんばった。

無謀さを承知の上で、商品が無理矢理買わせたこともあったし、自分に与えられたノルマを達成するためには、手段も選ばなかった。

時々、罪の意識は感じていたが、この街で生きていくため、自身の生活のためと心に言い聞かせ、仕事に打ち込んだ。やがて二年も過ぎる頃になると、営業成績は社内でも常に上位にとどまるようになり、特に所属する営業二課内においては、トップクラスになっていた。とにかくノルマをこなす。そのためには何でもする。営業成績に関しては、健太は健太なりの哲学を持っており、若さとエネルギーを駆使して懸命に働いてきた。

そのかいあってか、社内での基盤も出来上がり、その後は思いのほか順調に進んできたように思う。二十八歳の時、今の妻と知り合い一人前の恋愛をし、まもなく結婚。そして子供にも恵まれ、家庭人としては何不自由なく暮らしていた。しかし、今から三年前、それは起こった。

自社で開発した老人用健康器具を使用した一人暮らしの老人が――。

その出来事が、これほど健太自身を苦しめ、やがて、自分の生き方を変えることになろうとは、考えてもいなかった。

当時健太は、京成物産内で開発した老人用健康器具の販売促進チームのリーダーとして、営業の先頭に立っていた。

「よし、どんなこととしても売ってやる」

健太は考えた。

（会社も、この商品開発には力を注いできたという。「社運をかけている。頑張ってくれ」とチーム発足の時、社長は挨拶していた。とにかく、ここで実績を上げれば、自分にとって今後の出世につながる。とことん、やってやる）

心の中から湧いてくる思いが、自分へのプレッシャーとなり、また自分を過信してしまうエネルギーにもなった。

健太を中心にした営業スタッフは、どうすればより確実に年寄りに近づき親しくなることができるのか、連日思案した。

たび重なる営業会議を経て、数々のアイデアの中から、当時まだ少なかった老人介護を支援するデイサービスセンターに通い、ボランティアをしながら年寄りに近づき、親しくなったところで健康器具を売り、口コミで販路を広げていくことにした。

スタッフは、タウンページに目を通しながら都内にあるデイサービスセンターに電話して、連絡を取り始めた。健太自身も、「フレンドリー・デイサービスセンター」という介護施設で週二回、ホームヘルパーの助手としてボランティア活動をする契約を取り交わした。

一週間後、午前九時からの朝礼に間に合うように、施設に到着した。さっそくセンター長に挨拶をし、その後、全体朝礼に参加した。終了後、担当部署毎のボツ

クスミーツィンクが行われ、介護主任から、本日訪れる老人達の顔ぶれと、担当任務を指示された。見るもの聞くものすべてが初めてのことばかりで、内心困惑していた。

九時三十分、大型マイクロバスがセンターの玄関前にゆつくりと横づけされた。バスの中からは、一群の年寄り達が一人ずつ降りてきた。

その中には、元氣な足取りの老人もいたが、さすがにバスのステップを降りる時、介護を受ける老人もいた。家族がいても、自分の居場所がなかったりするの。か。それとも、一人暮らしの寂しさを紛らわすために、この場所にやってくるのか。いずれにせよ、さまざまな思いを持ってこの場所へとやってくるのだろう。

目の前の年寄り達の姿を見ていたら、自然とけんか別れした父親や温かく育ててくれた母親の顔が脳裏を掠^{かす}める。

（ここまでは老いていないにせよ、今頃どうしているんだろう。元氣だろうか？）

「健太さん、こっちに来て手伝ってくださいよ」

介護主任の声で想いは立ち消えた。健太は足早に年寄り達の方へと近づいてい

く。

（そうだそうだ）

思い出したようにつぶやきながら我に返った。自分には、隠された目的がある。自分は、例の健康器具を販売するリーダーとして、確実にセールスポイントを上げなければならないのだ。よって、何が何でも年寄りに近づく必要がある。

とにかく、そのことで頭の中はいっぱいであった。

しかし、ここでの彼らとの交流は、ある意味で健太自身をほっとさせてくれるひと時でもあった。彼らの昔話を聞いていると、今の現実の厳しさを忘れられるような気がしていたからだ。

健太は、二ヶ月ほどデイサービスセンターに通い、一人の年寄りと妙に親しくなった。名前を田村順造といった。

何回か会うなかで、彼とは馬が合うのか、自然に会話ができるようになり、互いに姿を見ると安心したように会話がはずんだ。

やがて、心が互いに打ち解けた頃、田村が言った。

「よかったら、一度遊びにきてくださらんか」

京成物産は、大手商社とは違い、会社存続のため、多少の粗悪商品も扱っていた。社内体質は、売上至上主義であり、本来ならばモニターを募集して最低数ヶ月程度は追跡調査を行ない、確実に安全と判断されなければ販売することはできないのだが、今回の健康器具の発売はそんな手順を踏んでおらず、相当な見切り発車であった。

しかし、当時の健太にとっては、それを販売することが家族の生活を安定させる手段であったし、自分を試すチャンスだと思っていた。

（自分は、東京に来てから、京成物産には大変世話になっている。本来、自分自身は、セールスマンに向いていないかも知れない。粗悪品と知りながら売らなければならぬ後ろめたさもある。これでいいのかと何度も思った。しかし、生きなければならぬ。多少のことは、東京の風が流してくれるんだ）

もう一人の自分が、常に健太の心を支配していた。

数日後、田村が住んでいるアパートに向かう。通りから離れた静かな住宅街の中に、外壁が白色に塗られた木造のアパートが見えてきた。近づけば、茶色の鉄骨階段のペンキがところどころはげ落ち、まだら模様になっている。強く押すとくずれ落ちそうな手摺りにつかまり、きしみかけたその階段を一步步上りながら、二〇三号室のドアの前に立つ。

「田村順造」と書かれた標札がぼつんとドアに張り付けてあった。そのドアを二回ノックした。

「田村さーん、田村さーん」

「あいよ。今、開けるから」

数秒後、「キー」ときしむ音をたてながら、ドアが開いた。

「田村さん、村川です」

「よく来られましたなあ。どうぞ、どうぞ中に入ってくださいよ」

デイサービスセンターでの気安さもあってか、すんなりと部屋の中へ通された。

玄関を入ると、左側にすぐ台所が見え、四人掛け用のテーブルとイスが置かれている。

玄関からの突き当たりの奥に部屋が二つ、二DKの住まいであろう。一人暮らしにしては、よく片付けられた部屋に思えた。中に通された健太は、台所に置かれたイスに座る。

「一人暮らし、大変でしょう。寂しくありませんか」

「ハハハ、この年まで生きてます。もう慣れましたよ」

「どちらかに身寄りはいらっしゃるんですか」

「うーん、まあ、北海道に親戚らしいのがあるけど、自分からは連絡しないし、ずっと疎遠になってます。東京には身寄りもないし、誰から見てもどっから見ても、一人暮らしの年寄りじゃよ」

「そうだったんですか」

健太に背を向け、台所にある食器棚から急須を取り出し、茶葉を入れ湯をそそぎ、お茶を出してくれた。

台所でお茶の仕度をする田村の背中は、言葉同様少し寂しげだった。

「一人暮らしも、気楽でいいもんじゃよ」

（俺は、この人にあれを売ってもいいんだろうか）

何気なく視線を逸らし、上を向く。

（いやいや、今の立場では、何が何でも売らなければならないんだ。それが、今生きる最良の方法なんだ）

熱いお茶を飲みながら、核心に近づくごと、タイミングを見はからって話しかけた。

「実は、デイサービスセンターではボランティアなんです。自分なりに、老人医療について勉強したいと思い、週二回ほど通ってるんです。本当は、京成物産という商社に勤めています」

健太は、おもむろに胸ポケットから名刺を取り出し、田村に渡した。

「それで、その Кейセイ……物産で、何をしてるんですか」

「はい、会社は商社なのでたくさんの商品を扱っています。自分はその中で、自

社開発した老人用健康器具を販売しています」

視線を下に向け、額に手を当て一瞬ではあるが、田村はげんそうな表情を見せた。その表情は、生涯健太の胸に焼き付くことになる。

「健康器具——？」

「ええ、当社で開発した老人用健康器具なんですよ。ぜひぜひ、田村さんに使用してほしいんですがねえ」

無理矢理勧めているしぐさは、見透かされている。しかし、ここで落とさなければならぬ。絶対に……。

「ぜひ、買ってくださいよ」

「私はもう、先が長くはないし、今さら健康器具というがらでもないけどねえ」

「田村さん、そんなこと言わないでくださいよ。せっかく親しくなれたのに、何とか健康器具を使って、田村さんにはぜひ、長生きしてほしいと思ってるんですよ。本当ですって」

田村は、相変わず下を向いたまま少し考えていたが、おもむろに顔を上げ、

ゆっくりと深呼吸した。

「村川さん、あなたがそこまで言うのなら身寄りもない私ですし、デイサービスセンターでは、随分とやさしくしていただいて本当にうれしかった。あなたが勧める品物なら信用できるでしょう。買わせていただきますよ」

「田村さん、ありがとうございます」

健太は、田村の両手を強くにぎった。

手肌は、老人にしてはともつやがよく、ふんわりとした弾力があつた。

多少の雑談をしたあと、再度「ありがとうございます」と礼を言い、田村の部屋を後にした。

帰りがけの街路を歩きながら、

「やった」

と一言、自身に投げかけ、大きく背のびをした。まんまと販売に成功したのだ。後日、健康器具を田村の部屋に運び、使用方法を説明したあと、契約を結んだ。（よし、よし、よし。年寄りなんて、持ち上げといってお願ひすれば楽勝かな。こ

んなにうまくいくとは思わなかった。この調子でいけば、けっこう売れるかも知れない)

健太は、有頂天になっていた。粗悪品を売りつけたという、罪の意識を感じるもう一人の自分は、心の奥底へと落ちていった。

数週間が過ぎたその日も、いつものようにデイサービスセンターに顔を出し、予定通り九時三十分に到着する大型マイクロバスを玄関前で待っていた。今日は、久びさに田村と会えるので心待ちにしている。健康器具のその後の調子も確認したかったし、今日は、友達を紹介してもらおうと思っている。わくわくしながら、また心躍らせながら、まだ来ぬ大型マイクロバスに乗っている田村の姿を想像していた。

大型マイクロバスは、玄関の上に掛けられた丸い時計の長針が真下に来たと同時に到着した。

しかし、バスから降りてくる年寄り達の中に、田村の姿はなかった。

(どうしたんだろう)

不安が募る。解消するには、会いにいくしかない。

健太は介護主任に、田村の部屋に様子を見にいきたい旨を話した。

「そうですね。いつも元気にバスを降りてくるのにねえ。じゃあ村川さん、悪いけど様子を見てきてくださる」

介護主任の言葉と頷く表情を確認し、すばやくアパートへ向かった。その間中、心臓は高鳴りっぱなし、かつ手のひらの冷や汗は止まらない。

ひっそりと佇むアパートに到着したのは、午前十時を少し回った頃だった。

錆びついたまだら模様の鉄骨階段を急ぎ足で上っていき、二〇三号室のドアの前立つ。

呼吸の乱れを整えたあと、目の前のドアを二回ノックした。

「田村さん、田村さん、村川です。いたらドアを開けてください。田村さん」
部屋の中からの応答はない。

(一人で遠くまで行くこともないだろうし、近くに身寄りもないと言っていたよ

な。眠っているのかも知れないが、もう十時を過ぎている。起きてもいい頃だ」

ドアを強めに数回ノックした。相変わらず部屋の中からの応答はない。ますます不安は募り、健太はアパートの大家の家へ行き、いきさつを説明し、部屋の中に入る許可をもらって合鍵を借りた。

「心配するほどでもないよ。疲れて眠ってるんじゃないの」

大家は鍵を渡す時、健太にそう告げた。

しかし、健太には言い知れぬ不安があった。

大家に一礼し、鉄骨階段を駆け足で上る。二階最奥の二〇三号室まで戻り、合鍵を使った。

カチャ。

ゆつくりとドアを開ける。暖かい空気が部屋の内部から外へと一気に吹き抜け、顔の皮膚に当たりながら通り過ぎていく。

急ぎ入った玄関で靴を脱ぎ、台所へ向かう。

そこには、電気ストーブがつけっぱなしになっており、部屋の中は汗ばむほど

の状態になっていた。電気ストーブのヒーターは、真っ赤になっており、危うく火事にでもなりかねないところだった。真っ赤になった電気ストーブの電源をすばやく切る。そして、台所の小窓を開ける。外からは、冬の冷たい風が勢いよく吹き込んでくる。ひと息ついた健太は、後ろをふり向き叫んだ。

「田村さん、台所の電気ストーブがつけっぱなしですよ。田村さん、田村さん」

やはり応答はない。健太は、台所から突き当たりの奥にある部屋へと進んだ。以前来た時と同様に、台所はきれいに片付けられている。突き当たった部屋の引戸をゆつくりと右側に開ける。そこには、健太が売った健康器具がぼつんと置かれており、その奥に人影が見えた。二、三步踏み出すと、田村がうつぶせで眠っていた。急いで近づきながら、声をかける。

「田村さん、もう十時を過ぎてますよ。早く起きましょうよ」

（もしかして、健康器具で体力を消耗して、横で休んでいるうちに眠ってしまったのだろうか）

体を少しゆすってみたが、応答がない。念のため、うつぶせで眠っている田村

の脈拍を測ってみた。

「あれ？ 脈がない」

健太は、デイスービスセンターに通うようになってから、ホームヘルパーの講習を受講しており、その時に脈の測り方を教わっていた。

「左腕の脈拍がない？」

半信半疑のまま、首筋の脈拍も調べてみる。やはり、脈はない。

（ええ？ もしかして死んでいるのか）

そう判断した瞬間、頭の中はぐちゃぐちゃになり、そして真っ白になった。

「どうして……田村さん、どうしたんですか！」

（落ち着け、落ち着け）

自分に言い聞かせながら、そっと右手の人差し指で、田村の左腕の皮膚を押してみる。すでに硬直した状態になっていた。先日訪問した時、田村の両手をぎゅつとにぎった時の肉感の弾力性は、もうない。健太は、自分の皮膚を押してみた。やはり、あまりにも違いすぎる。

（大変なことになった）

二、三步、自然に後ずさりながら気を取り直し、部屋を飛び出して大家のところへ行き、今見てきた部屋の中の状態を克明に話した。

大家の顔から瞬時に血の気が引いたように見え、凍りついた体からは精気が抜けていくかのようだ。

「本当ー？」

茫然としたまま肩を落とし、ひと言発するのが精一杯のようであった。

健太は、立ちつくす大家の腕をつかみ、何とか二〇三号室まで連れてきた。大家は、奥の部屋でうつぶせに倒れている田村をじっくりと眺め、大きく深呼吸をしたあと、気を取り直したように淡々と口を動かした。

「もう、死んでますねえ」

「どうでしょう」

我ながら、その質問は的を射ていないような気がした。何も考えられない自分とは裏腹に、大家はまた淡々とした口調で答えた。

「まず、一一九番に通報しなければ……」

すぐに、自分の携帯電話から一一九番へ通報する。住所と田村の状況を説明し、「早く来てください」とお願いして電話を切った。

それからの十数分は、腕時計の針が止まったと思えるくらい、長い時間に感じられた。

（自分が無理矢理売りつけた健康器具が、もし、死因になっていたら……。自分は、大変なことをしてしまったのか）

あまりにもあつけない人間の最期の姿を見て、言いようのない寂しさとむなしさを覚え、また、自身のバカさかげんを思った。

やがて、遠くからサイレンの音が徐々に大きく聞こえてきた。すでにアパートの周りには、救急車のサイレンの音を聞きつけて、やじ馬やら近所の人々が大勢つめかけていた。

救急隊員が三名、急ぎ足で階段を上り、二〇三号室へ入ってきた。

そして、うつぶせに倒れている田村の現場状況をじつくりと確認したあと、納

得したように話しかけてきた。

「この方の体には、死亡した人間の皮膚に現れる死はん、つまりはん点がありません。亡くなってから数時間が経過していると思われるので、今から病院に運んでも無理です。これから警察に連絡します」

健太は、ただ呆然としたまま、その状況下にいた。救急隊員が連絡を取ってから、十五分ほどで警察官四名が現れた。彼らは私服の刑事と鑑識官であった。

「第一発見者は誰ですか」

「私です」

と答えながら刑事の前に進み出た健太は、問われるままに自分の氏名、現住所、勤務先等を話し、次に発見した状況を細かく説明した。聞き取りをしている者以外は、検証のため、部屋にあるタンスや小物等が入った引き出しを丹念に調べたり、室内の写真を数枚と、当然のように遺体の写真も違った角度から撮っていた。そして、遺体を少し動かしながら、体全体に外傷があるかどうかも調べていた。（病院以外で亡くなった場合には、まず殺人の疑いから警察は調べるのか）

健太は、未だ目の前の出来事が信じられないまま、部屋の片隅で当惑していた。
(自分の販売した健康器具が、死亡の要因となっていたらどうしよう)

部屋全体の様子と遺体状況を確認した刑事は、健太に近づき告げた。

「外傷はなく自然死かも知れませんか。ただ、ここでは確定できないので、死因をきちんと特定するために、これからご遺体を警察署に運びます。どなたか身寄りの方がいるか、村川さんご存知ありませんか」

「何度か会って世間話をしている時、北海道に親戚がいると言っていました。ただし、その親戚とは、長いあいだ連絡を取ってないそうです。刑事さん、一人寂しく亡くなるなんて、切ないです。あまりにも不憫ふびんです。何とかして、身寄りの方を捜してください」

「——ん。わかりました。全力でやってみましょう。村川さん、あとは我々が内部検証をしますので、一度帰っていただいてけっこうです。ただ、もう少しお聞きしたいことがありますので、すみませんが午後三時に警察署の方に来てほしいのですが」

「わかりました。うかがいます」

健太は、田村の部屋を出た。鉄骨階段を降りかけながら、今までの緊張を和らげるため、タバコに火をつけ、煙を胸の奥まで吸った。もし、万一うちの商品が要因だとしたら——。

セールスをする健太にとって気持ちのいいものではなかった。

午後三時に警察署を訪ねると、刑事から親戚とやと連絡がとれたと聞かされた。

肩の力が抜けるほど、ほっとした。

「今晚、北海道から東京に向かうと言っていましたよ」

刑事の何気ないが、やさしさのこもった言葉を聞き、ひとまず安心した。が、どうしても胸のつかえがおりず、

「すみません、死亡原因は何でしょうか。よろしければ教えてください」

「結論は心筋梗塞でした。ただし、横に置いてあった健康器具が心臓への負担を大きくしていたかも知れないと監察医は言っていましたよ。特にあなたは第一発見

者ですし、今は親戚の方も来られていません。あなたなら信用できると思い、報告しました」

「ああ、そうですか」

健太は気拔けたように答えたが、全身からは血の気が引いていき、立ちくらのみの中、刑事室の机に左手をついた。そして、目を閉じ、大きく深呼吸をしたあと、ゆっくりと一礼して署を後にした。歩きながらも警察署をふり向く気力は失せていた。

その日以来、どうしようもないむなしさが心の中で大きくふくらんできた。そして、健太の心の中で何かが変わった。セールスへの情熱は冷め、成績は下がる一方になった。自分の意志とは反対のことも、生きるため会社のためと言いがら行ってきた自分に対して、憤りさえ感ずるようになった。健太の営業成績が、以降トップクラスになることはなくなった。上司からは冷たい視線で見られ、後輩達には追い抜かれていく。唯一、受付を担当している本橋利恵だけは、重そうな足取りで出かける健太を見ては、いつもロビーで、

「いろいろあるだろうけど、頑張って」

と勇気づけてくれた。彼女は、健太に起こった出来事を自分のことのように感じ、悩み励ましてくれた。彼女もまた、東京で生きていくことの辛さや厳しさを感じ、健太と相通じる想いを胸にいだいていたのであろう。

営業成績が下がるということは、当然収入にも響き、何度となく家庭内で妻との口論が起こるようになった。それまでは、愛情の深みをいっぱい感じていた健太ではあったが、「お金」という現実がすべてを変えていった。

妻との会話は徐々に少なくなり、食卓には日々パックに詰められた味の濃い食品が並ぶようになった。何不自由なく家庭人として暮らしていた環境は変化した。夫婦の関係はきしみ、子供達との会話はなくなり、楽しいはずの我が家には、いつも重苦しい空気が漂うようになっていた。健太の周りの世界が家庭を含め徐々に崩壊していくようであった。心のむなしさだけが倍増していく。

都会のすばらしさはある。けれど「仕事のため」という言葉によって、すべてが許されてしまう恐ろしさを都会は持っている。

(これでいいのか)

健太は、自分自身との葛藤をくり返ししながら、この三年余りを過ごしてきた。

「これが、東京なのだろうか」

神田西口商店街の薄明るい空を見上げながら、ため息をついた。複雑な思いを胸に抱きながら、さまざまな人々が、この都会で生活しているのである。

健太もまた、この世界で生活している一人。

それが、現実なのだ。

商店街を出ると、すぐにＪＲ神田駅に着く。健太は通勤に、毎日山手線を利用している。山手線で三つ目の駅が上野駅。そこで下車し、常磐線に乗り換えて柏市にある自宅まで帰るのである。

今日は週末ということで、会社の同僚と京成物産近くにある酒亭「しま」という、行きつけの小料理屋で酒を飲んだ。上司の藤原課長と女性営業マンの高野女史、そして健太の三人であった。飲み始めるとさっそく藤原課長は、健太の営業

に対する姿勢が甘いと叱咤し、

「要は結果だよ。おまえには才能がある。結果さえ出しゃあ、どんなことがあるうと勝ち組になれるんだ。敗者は、この街にはいらんぞ。わかっているのか。うーん？ おい」

相変わらず課長の発言はきつく押し掛かる。

高野女史は、営業は人間関係の構築から始まるのよ、と彼女独特の持論を語ってきた。高野女史は、健太よりも先輩の営業レディーなので、敬意をこめ高野女史と呼んでいた。女史は人を決して見下したりせず、年下の自分達の意見にも耳を傾ける包容力のある女性だと健太は以前から、常々思っていた。

藤原課長と高野女史、互いに意見は違うが、今日は自分を励ましてくれているのだらうと健太は思った。久しぶりの日本酒と一週間の疲れもあり、酒の回りがいつもより早いように思えた。

神田駅に着いた健太は、自動改札機を通り、階段を上り、三番ホームで池袋方

面行きの電車を待っていた。週末ということもあり酒席は長引き、腕時計を見た
ら午後九時三十分を回っていた。

いつものように緑色の電車は、轟音と共に神田駅に入ってきた。健太は、ドア
が開かれた車両の中に乗り込んでいく。中は帰宅途中の人達で混雑しており、座
席には眠っている人や疲れてボーッとしている人達など、さまざまな人間模様が
うかがえる。健太は立ったまま、反対ドア付近で人々を観察したり、窓越しのビ
ルの風景を見たりしていた。

途中、御徒町駅下の軌道に敷き詰められた砂利石のすき間から、たった一本だ
け生えている雑草を見つけた。誰にもこびることなく、遠慮することもなく、た
くましい姿で天に向かって伸びている。自分に置き換えた時、少し恥ずかしさを
感じた。

御徒町駅を出ると、電車はゆっくりと右にカーブを描きながら上野駅二番ホー
ムに滑り込む。健太は、混み合った車両から左右一二メートルはある広い上野駅
のホームに降りた。

週末の上野駅で降車する人の数は多い。広いホームには、人があふれ返り、ま
るで津波のような人々のうねりの中を歩きながら、階段を降りていく。

駅の地下道に入る。天井は低く、柱を支える梁下のコンクリートに頭が当たる。
コンクリートの至るところには、危険防止の黒と黄色の保護具が取り付けられてあり、
かつ地下通路は非常に入り組んでいる。いつもは、この地下通路をそのまま通り
過ぎていくが、今日はふと立ち止まり、視線を東北線の時刻表に向けた。

〈『はくつる』二十二時二十三分青森行、一五番線〉

なつかしさが頭をよぎる。ここ何年かのさまざまな出来事への思い悩みのせい
か、故郷で暮らしていた頃の思い出が、時々夢に出てきていた。

「故郷か」

健太は何となく「青森行」と書かれた時刻表を見て、ちよつと帰りたくなった。
(都会からの逃避行といこうか)

何か言い訳をしても、今のこの状況を変えたかった。
(そういえば、だいぶ親父達にも会っていないし)

酒の勢いが、そうさせたのかも知れない。

健太は、逸る^{はや}気持ちを抑えきれずに、上野駅で『はくつる』の切符を買ってしまつたのだ。

寝台列車『はくつる』のホームは一五番。

一三番・一四番と同様、中央口からの突き当たりがそうだ。

上野駅中央口は、鉄骨の天井が高く広々としており、駅舎の中では、たくさんの人達が無秩序のように歩いているが、改札を通り抜けると一様に左に曲がり、階段を上って行く。

皆山手線や常磐線に乗り込むため、足早に歩いている。

一五番・一四番は、他の在来線ホームとはどこか雰囲気が違う。ひっそりと静まり返ったホームの空気は、郷愁を感じさせる独特の雰囲気漂わせている。鉄骨で覆われた屋根を支える両サイドの丸柱が、ドーリア式神殿を思い出させる。荘重な造りの太く短い柱のホームは、古代ギリシャの建造物のようである。

健太は、ふり向いて中央口を見ながら、時間の流れに不思議さを感じた。中央口付近の人々の多さと足早に歩く人達を見れば、時間がものすごく速く進んでいるように見える。

だが、一五番・一四番ホームのひっそりと静まり返った空間の中では、時間がゆっくりと進んでいるようだ。

健太は、切符をにぎりしめ、中央口付近から一五番・一四番ホームへ進む広場を歩きながら、速い時間の流れからゆっくりとした流れの世界へ移動していく自分を感じた。まるで磁石に吸い寄せられる砂鉄のように。

(何か別の世界へ来たような気がする)

二十二時二十三分発の寝台列車『はくつる』は、すでに一五番ホームに停車しており、健太はゆっくりと近づいていく。その時、一瞬立ち止まりホーム下を見つめた。一五番ホームの入口から軌道は敷かれている。

すべての始まり、ここがゼロ起点。それとも健太にとっては終点なのか。複雑な思いを胸に、改めて『はくつる』に視線を向けた。

いろいろな思いを乗せて、今日もこの列車は上野駅を出発するのだろう。健太もその一員になるのだ。

『はくつる』は、青色の車両に白い線が一本青色を分けるように通っている。『青森行』と書かれた標札は、歳月の重みで黄ばんでいた。

夜が似合う車両である。

先頭から五両目に乗り込んだ。自分の寝台を見付け、座席に腰を下ろした頃、駅のアナウンスがホームにこだまする。そして、『はくつる』は定刻に上野駅を出発した。ゆっくりと滑るように北国に向かい走り出した。

走り始めて二十分もすれば、都会のネオンの明るさも次第に少なくなり、やがて闇の中に入ってしまった。健太は、眠りにつけないまま通路にあるイスに座り、窓越しに外を見ていた。

外には闇夜が広がっており、窓越しに時折家の明かりがぼつりぼつり小さな点として見える。顔を窓に近づけた時、車内の明るさに反射した、自分のようで自

分ではないような顔が映る。健太は、何かいけないことをした時のような異様な興奮を覚えた。背中がぞくぞくとして、力まかせに缶ビールの栓を抜いた。

上野駅で買った缶ビールをぐいっと飲み、少々のつまみを口にする。そして相変わらずの闇に包まれた外を眺めながら、これまでの東京での出来事を頭に浮かべていた。思えば思うほど答えは出ない。

俺は、これからどう生きていけばいいのだろう。妻や子供を守り、幸せにしてやらなければならない。しかし、最近の東京にはついていけなくなった。人と人とが関わるということは、どういうことなんだろう。取りとめのない思いが独り言のように頭の中を駆けめぐる。

健太は、三本目の缶ビールを飲みながら、闇夜の窓に映る自分を見ていた。

どれくらいの時間がたっただろう。ふと健太は、人の気配を背中に感じた。そつと後ろをふり向くと、年の頃七十歳を超えたほどの小柄な老人が、隣の車両からこちらに向かって歩いてきた。一瞬、健太は亡くなった田村順造と姿が重なって

ビクツとした。

老人はゆっくりと健太の方に近づいて、やわらかな口調で問いかけた。

「あなたは、この列車に乗ってどこまで行くのですか」

「——あ、あの、故郷の野木町に帰るところです」

戸惑う健太に、

「ほう、何か用事でも」

「いやあ、特に大した用事はないんです。ただ、何となく東京の生活に疲れまして……。実は今日、同僚と酒を飲んで自宅に帰るところ、上野駅で東北線の時刻表に『はくつる』寝台列車の文字を見て、なぜか乗ってしまったんです。考えたら両親とも十八年間、会っていませんし」

「疲れてしまったという東京は、あなたにとってどんな街なんですか」

健太は、突然自分のもとへやってきた老人にあれこれと聞かれることに、多少の面倒臭さを感じつつも、何か不思議なものを感じていた。

（何だか、どこかで会ったような気がする。でも奇妙な人だなあ）

あれこれ思案しながらも、つい老人の問いに答えている健太だった。

「東京に来た頃は、すべて楽しく感じました。見るものみんな新しく、とっても活気のある街だなあって。仕事は職を何度か替えながらも、二十歳の時、今の会社に入社しました。セールス……まあ営業の仕事です。京成物産——というのが会社の名前なんですが、自分はこの会社には中途採用なので、みんなに負けたくないと思い、頑張ったんです。数年して、会社内ではトップクラスになりました。やがて結婚し子供もでき、順調に何年かが過ぎたんです。それが——」

健太はうつむき、肩で息をついた。

「今から三年前、自社開発した商品をセールスした一人暮らしの老人が亡くなってしまったのです。死因は心筋梗塞なんです。多少なりとも我が社の商品が死亡への要因になっていたかも知れないと、当時刑事さんから聞かされたんです。自分もあの時はトップセールスマンで有頂天になっていたんですが、それ以来、自分が売ってしまったから、という罪の意識が頭から離れないんです。三年前の出来事なんですが、何でもありを通せる東京という世界が、何だか自分に合わなく

なってしまったような……。今後もそういう環境の中で生きていけるのか、不安です」

「それは大変でしたな。しかし、過去は過去。あなたには、未来があるでしょう」
「え？」

「どうじやろう、わしといっしょに川戸村に行ってみませんか。野木町に帰る目的は、そんなにはつきりしておらんでしょう。どうですか」

（まったく奇妙な老人だなあ）

健太は、自分自身の人を見る目を多少なりとも信じていた。

（まあ、そんなに悪い人でもなさそうだし、旅は道連れという言葉もあるし。ここまで来たのだから、それもいいかも知れない）

「おじいさん、その川戸村ですが、どこにあるんですか」

老人は、一度闇に包まれた窓に目を向けたあと、

「川戸村は、青森と岩手の県境にある小さな村ですよ」

「ええ!？」

声をあげなければならないほど、びっくりした。健太自身が帰ろうとしている故郷こそがその辺りであるのに、付近にそういう名前の村など聞いたことがなかったからである。不思議そうに思案顔している健太に、老人は言った。

「まあ、明日の朝には着いていますから、私がその村を案内いたしましょう。ご心配なく。心は決まったでしょう」

健太の不安顔に向かって、笑みを返したあと、老人は背を向け、隣の車両へと歩いていった。背をかがめて左右に肩をゆらしながら去っていく老人の姿は、やがて寝台車の重い扉の中へ消えていった。

老人は、作務衣を着ていた。いや、正確には作務衣のような服を着ていたと思う。淡い藍色の上下着で、巾着袋を首から下げていた。

（あの老人、上野駅から一人で乗車したんだろうか）

健太は一人で考えていたが、先程から飲んでいた缶ビールのアルコールがきいてきたのか、ちょっと目まいがしてきた。イスから立ち上がり、自分の寝台へと歩いていく。

そして、寝台の中に滑り込み、今起こった不思議な出来事をまた少し考えた。アルコールのせいで思考能力は低下しているが、

（あの老人は俺に何をしたいんだ？俺をだます気なのかなあ。なに、こっちはセールスをやっているんだ。多少のことではだまされたりはしない。万一、嘘話であれば、すぐに見やぶれるさ。心配することはないさ）

でもあの老人は、そんな悪い人には見えないが……などと思いをめぐらしているうちに、自然と睡魔がおそってきた。

（何だか、疲れたなあ）

寝台に体を横たえると、暖かさが足元から全身に広がり、健太はだんだんと眠りの中に沈んでいった。

翌朝、寝台列車の中に駅名が告げられる。

「次は川戸駅です。お降りのお客様は、お早めにご準備ください」

寝台車の下段ベッドの中で眠っていた健太は、車内アナウンスの声で目を覚ま

した。ベッドの上で仰向けになったまま、

（そうか、昨日出会った老人と俺は、川戸村というところへ行く約束をしているんだ）

と思い出した。

「でも、そんな村、本当にあるのかなあ」

ベッドの中で独り言を天井に投げかけ、寝台のカーテンを開けると、そこに昨夜の老人が立っていた。目と目が合った瞬間、金縛りの如く硬直したまま呆気に取られた。

「さあ、着きましたよ。私といっしょに行きましょう。早く起きてください」

「——はい」

顔を左右にふり、鼻を一度左手でつまんで我に返った健太は、寝台から立ち上がった。老人は昨晩と同じ作務衣のような服を着て、健太に笑顔を見せていたが、寝台列車がスピードを落とし始めたことを確認すると、健太に背を向けデッキの方へと歩き始めた。健太は、ただ老人の背後を見据えて歩いていった。

ゆるやかに速度を落とした列車は、ブレーキの音が鳴りやむと、わずかに車両をきしませて動きを止めた。

『はくつる』寝台列車は、川戸駅に確かに停車した。デッキの扉が開き、健太は老人と共に列車から降りた。そして、目にした風景に言葉を失った。まだ寒い冬の季節だというのに、辺り一面は春のなごやかさを思わせる霏雨気なのである。地面には、牡丹や芍薬をはじめとした春花が咲いている。健太の視線に入った桜の木は、満開に花を付け優雅に立っていた。淡いピンク色の桜の花は美しく、健太の心をなごませた。辺り一面の風景に圧倒されながら、しばし春の景色を眺めていた健太に、少し前を進んでいた老人はふり向いた。

「さあ、私の家に行きましょう」

追いかけるように小走りで近づき、小柄な老人の後からホームらしきところを駅舎に向かっていく。

（随分小さな、しかも古い建物の駅舎だなあ）

老人と共に改札を通ったが、駅舎の中には人影はなかった。

（無人駅？ 無人駅に寝台列車は止まりはしないはずだが……。おかしいなあ）

疑問の答えを知りたくて、老人の背中に問いかけた。

「おじいさーん、おじいさーん」

しかし、老人は問いかけを無視して歩いていく。自然の美しさに立ち止まっていた健太であったが、老人が一人足早に先を歩いていく姿を見て駆け出した。

「どうですか、川戸村は……」

老人は、列車を降りてから初めて健太に話しかけてきた。

「はい、でもまだ冬だというのに桜の花が咲き乱れ、地面にもたくさん春の花が咲いている。これは一体、どういうことなんですか」

老人は健太に向かって少し笑みを浮かべただけで、質問に答えることはなかった。小さな駅舎を背にして、二人は歩き出した。歩いているうちに、ある異変に気づいた。

（ここは、日本だよなあ。いくら田舎といっても道路はアスファルト舗装のはず。土の道なんておかしいなあ。ここは本当はどこなんだ？ でも、何となく心が落

ち着くし、なつかしいような気がする)

それは、健太の目に映る素朴な風景の美しさなのか。それとも、今吸っているこの空気のおいしさのせいなのか。深呼吸をするたびに、脳が洗われていくような不思議な感じがした。

老人の後をついていく健太は、もう一つ別の異様さに気づく。それは、道行く里人の服装が実に古めかしいことであつた。老人の着ている作務衣のような服もそうだが、若い女性が小袖を着て歩いているさまは、何か今の感覚に合わない。とても今の日本だとは思えないのだ。

駅舎を背に歩き出し、駅前通りから外れた道幅四メートルほどの通りを老人の後を追うようについていく。しばらく歩いた頃、Y字の別れ道を右方向に脇道へと進んだ。道は徐々に狭くなり、平坦路から少し坂道になっていく。

老人は、七十歳ぐらいのその見た目からは想像もつかないくらい、軽やかに歩いていた。坂道になつても歩く速度は衰えず、逆に健太が小走りで老人の後をついていかなければならないほどであつた。

坂道がさらに急になってきた頃、左前方に神社が見えてきた。今歩いている地面から階段で六、七段上った高台の上にこぢんまりとした風貌の神社が建っている。神社の前は小さな空地になっているようだ。空地の周りと神社への階段のところに、何本かののぼりが立っているが、行書で書かれている文字の意味はわからない。健太が坂道を歩きながら神社の方を見ている様子を感じたのか、老人は立ち止まり、語りかけてきた。

「健太さん、あの神社の空地でなあ、夏になると盆踊り、春は種まき祭り、秋は収穫祭、そして冬には正月祭りなど、四季折々の自然と共に、さまざまな行事をするんですよ。」

神社は、この村の守り神です。自然に対して感謝の念をいつも持っている里人が集まり、神社の空地で楽しいひと時を過ごすんです。——そして、ご覧なさい、あのきれいな花達を」

神社の周りには、駅舎で見かけた牡丹や芍薬の花が色鮮やかに咲いていた。

「花の美しさは何物にもかえがたい輝きです。咲いている時は短いけれど、精一

杯あでやかに生きている。しかし、一本の茎からは一つの花。美しく咲く一輪の花を輝かせるために間引きされるつぼみは、はるかに多い。

生きる物の厳しさがそこにはある。人々も暮らしの中で自然に他人を傷つけた、疎外している時があるかも知れない。自分が輝くために、誰かを犠牲にしている時があるかも知れない。私達は、自然の温かさや厳しさの中から人としての生き方を学ぶのです。だから自然に感謝し、敬うために、この神社に集うんです」

老人に向かって健太は声をはずませた。しかし、老人は健太の顔を見ては笑っているだけだった。

神社を通り過ぎると、一人がやっと歩けるほどの道幅になってきた。そして、前方の高台に一軒の古びた家が見えてきた。前を歩いていた老人は立ち止まり、ふり向いた。

「あの高台に見えるのが私の家です。もう少しです。道幅がとても狭いので、足元に気をつけてください」

健太は、老人の後を歩きながら目にした風景を想い浮かべ、依然ここは一体どこなのか、しばらく考えていた。

老人の家までは、小さな駅舎を出てから三十分ほどだった。時計で計ったわけではなかったが、だいたいそんな感じだろうと健太は思った。

駅から歩いてきて感じたことは、老人を含めすれ違った里人がまるで自然の一部になっており、つねに自然に目を向けて大切に、自然と共に暮らしていることだった。何か自分もこの自然の中に溶け込んでいくように感じた。そして老人の家が健太の目で確認できるほど近づいてきた時、思わず立ち止まり、硬直したまま手を口に当てた。

「わあ、何という家なんだ」
そしてこの光景は――。

健太は絶句した。四方流れの屋根は茅葺で造られているが、至るところにどこからか飛んできたのであろう花の種が付着し、やがて成長し八方で開花している。健太の右手側には畑が広がっており、母屋の脇にはわとりを飼育している小屋

がある。数羽のしゃもは野に放たれ、自然に生えている草の芽を食べている。健太の前方には大きな柿の木があり、小さい頃よく木に登って柿を落としていた自分を思い出した。母屋の右奥はさらに小高い丘となっており、丘全体が畑になっているのだろうと想像できた。老人は、玄関と思われるところから母屋の中へ入っていった。

「ばあさん、帰ったど」

健太も老人の後を追うように母屋に入っていく。玄関から右前面は、縁側みたいになっていた。太陽の光が縁側の床板を鮮やかに照らしている。浮かび上がった板目模様はくつきりと三次元に広がり、まるで萬華鏡の中にいるような空間に見えた。健太には、すべての光景が目には焼きついてしまうほど新鮮に映った。

奥の方から、おばあさんらしき声がした。

「お帰りなさい。——ところで、じいさんの隣にいる方はどちらさんですか」

こちらに近づきながら老人に問いかけた。

「東京という街で、いろんな出来事があつたようでの、最近特に疲れたみたいで、

何となく列車に乗ったという方じゃよ。疲れをいやすには、この村がいちばんと思つて連れてきたよ」

「じいさん、それはいいことをした。——そうそう、朝めしはまだでしょう。さ

あ、お客さんも早く中に上がって食べてください」

おばあさんは、微笑みながら健太の方を向いて手招きした。

「村川健太といひます。よろしくお願ひします」

健太はおばあさんに向かって挨拶をした。老人はもうすでに玄関先で草履みたいな靴を脱いで、奥に入つていった。健太も靴を脱ぎ、黒褐色の板の間を奥へと進んでいく。

「さあ、こっちですよ」

指し示された大きな居間に入ったとたん、健太の呼吸は止まった。大広間の中央には大きな柿の木があり、台所と思われる場所の奥隣りの土間には馬がいた。馬は二頭で、横に渡された小さな丸太に縄でつながれ、静かに干し草を食べていた。いろりは二メートル四方くらいで、中央には大屋根の梁から直径二十センチほど

の孟宗竹もうそうだけが下ろされ、下部には金具が取り付けられて自在鉤じざいかぎになっている。そしてそこには直径五十センチほどの鉄瓶が掛けてあり、下からの火力で熱せられ湯気を出していた。屋根梁から下ろされている竹は、いろりからの煙に何年、いや何十年といぶされ黒光りしている。重厚に黒光りしたその竹は、まるでこの家の床柱のように思えるほどの芸術品に見えた。まさに、自然の恵みが作り出した風景である。

居間全体を見渡した健太は、あることに気づいた。それは自分が小さい頃、母から聞かされた昔の家の風景そのものだったのである。

いろりの前で、黙って居間全体をさらに見渡しながら立っている健太に向かつて、

「さあ、村川さん、ここに座って食べてくださいな」

おばあさんは、茶碗にごはんを盛り、盆に乗せ、目の前に置いた。

出された食事は、ごはんにみそ汁、漬けもの。品数は少ないけれど、辺りに熱いみそ汁の心地よいふんわりとしたい匂いが漂っている。

(食欲がそえられるなあ)

健太は、漂っているいい匂いを胸いっぱい吸い込んでから、ごはんを一口噛んだ。口の中に、かまどで火加減を気にしながら、おばあさんが炊いたであろうふつくらとしたごはんの香ばしさが伝わり、口全体に広がっていく。

ごはんの食感がたまらない。ほどよい水加減の中で、ゆつくりと熱せられ水分を吸収したごはんの一粒一粒が、歯で噛むことによって躍り出す。そして、のどを通り胃袋の中へと進んでいく途中の食道に、温かい熱を置いていく。やがて、体全体が心地よいぬくもりに包まれる。案の定、みそ汁はなつかしさを伴う妙味である。のどをゆつくりと通る時のみそ汁の温かさは格別だ。みそ汁が胃袋へ到着したあとも、口の中にはみそ汁の味が薄っすらと残る。口の中がさらにみそ汁を欲しがっている。

もう一杯口の中でみそ汁を包み込む。お腹が空いていたので、みそ汁が胃袋の中でうねりをあげ広がっていくようだ。そして、ぬくもりがさらに増したかに感じられた。

(なんて、おいしいみそ汁なんだ)

きつと自家製だ。おばあさんが丹念に日々みそをかき回しながら、食への感謝と愛情をこめて作ったに違いない。ごはんを茶碗に盛ってくれた時のおばあさんの手の甲のしわがそれを物語っている。

ごはんのみそ汁を互いにはおぼりながら、食膳の中央にある小皿に盛られた漬けものに箸を持っていき、口の中に入れた。漬けものはピリツと締まったかぶ漬けだった。噛むほどに口の中のコリコリという快音が脳天まで伝わる。淡いピンク色のかぶは、適度な酸味がたまらなく、重石^{おもし}がかぶ全体に味を行きわたらせているのだろう。素朴だけれど、人間に必要な食の原点がここにはある。すべての食べ物が健太にとって心地よい味わいとして吸収された。

(品数は少ないが、こんなおいしい食事は初めてだなあ)

ここ何年かの毎晩の食事は、妻とのぎくしゃくした関係からか、いつも機械で作られたお定まりのパック詰めのお惣菜だった。結婚した頃は、妻が自ら作ったみそ汁も出てはいたが、今ではほとんどインスタントになっている。それがいやだ

ということではないけれど、やはり何か寂しさを感じる。ごはん茶碗を持ったまま、我が家での食生活のことを考えていた。

「村川健太さんと言いましたねえ」

「——はい」

「ごはん、みそ汁おかわりいかがですか」

おばあさんは、物思いにふけっている健太にやさしく語りかけた。おばあさんに一礼したあと素直に答えた。

「ぜひ、お願いします」

おばあさんが健太の差し出した茶碗にごはんを盛っている間に、口の中に残る食感が何かを想い起こさせた。

(どこかなつかしさがある。——そうだ)

自分の記憶をできる限りさかのぼる。舌がかすかに覚えていた。小さい頃、祖母の家へ行った時に食べた味に似ている。

(もうあれから三十数年もたってしまったのか)

今は、すべてインスタント商品でまかなえる都会での食事。便利さはあるけれど、何かを失っている。毎日、ただ胃の中へ食物を押し込むだけの生活。

健太は、何となく今のこの場所に愛着が湧いてきた。食べながら毎夜の食事風景が蘇ってはくるが、今は安らぎをもってこの食事のひと時を楽しんでいる。

ごはん、みそ汁、漬けものすべてを平らげたあと、おばあさんは茶碗に一杯の水を持ってきてくれた。

「健太さん、飲んでくださらんか」

渡された茶碗を左手に持ち、一気に水を飲み込んだ。水はのどから食道を通じて胃の中へ、そして体中にしみわたる。

「おいしい——」

ただの水なのに、しっかりと口の中で味わいが残る。

「おばあさん、この水おいしいです」

「そうですか。この母屋の少し先に沢があって、そこから汲んでくるんですよ」話しかけながら、沢の方角を指で示した。

こんなおいしい水を使っているからこそ、ふつくらとして、かつ、きちんとコシのあるごはんや、体中に力が漲るみなぎみそ汁が作れるのだろう。まさに、自然の産物「水」と体内に存在する水分とが結合して血肉となるのか。

そして、ここに来るまでに出会った里人達のように自然に近づけば近づくほど、自然に溶け込めば溶け込むほど、食物のやさしさが細胞の一つひとつに行きわたり、体と心を形成するのであろう。

そう、人間として本来持っているやさしさやいたわり、そして愛情などを……。しかし、今の都会では男も女も言いたいことを胸の奥にしまい、耐えながら生活している。他人の目や上司の目などを気にしながら、自然のように振る舞っている。心とは裏腹な態度を周囲に示しながら、自分なりに理由を付けて自分を納得させている。本来の想いは、マグマのように噴き出してこようとする。でも、男も女もそれを抑えながら、また自然のように振る舞う。

物質文明や機械文明の中、溺れる自分を隠して生きている。心と態度の違いの不自然さは募るだけ。健太もその中の一人であつたらう。

しかし、今この環境の中、自然と整合した素朴な朝ごはんを食べた健太は、心と体の歪みが和らぎ、魂が解き放たれていくのを感じていた。

隣で健太の内心を見透かしていた老人は、食事を終えた頃を見計らい肩をたたいた。

「この先に小高い山がある。途中、ばあさんが言っておった水を汲んでくる沢も通ります。どうじゃろう、私といっしょに行ってみませんか」

今の健太は、昨日までの重苦しい緊張した心中ではなく、すがすがしく体が軽く感じられていた。

「おじいさん、行きます」

（山道を登って行くのか。おもしろそうだなあ。沢を通るって言ってたなあ。そういえば、小さい頃、田舎の沢で友達数人といっしょに遊んだよなあ。なんかわくわくしてくる）

健太は、おじいさんよりも早く立ち上がり、体中から湧き上がる強い力を抑えきれずにいた。

「おじいさん、早くー」

まるで童心に返ったような健太の行動である。老人は急かす健太に合わせるように、玄関で草履のような靴をはいた。

「おばあさん、朝ごはんごちそうさまでした」

元氣よくお礼を言くと、居間の奥からばあさんのやさしい声が返ってきた。

「気をつけてねー」

足早に玄関を出て、縁側を左手に右手に、柿の木を見ながら歩き始めた。相変わらずしゃもは、野の中で自然に生えている草芽をおいしそうに食べている。

「しゃも君、元氣でな」

健太はそんな言葉を口にした。当然しゃもに伝わることはないが、心の中から湧いてくるたとえようのない高揚感が健太にはあったのだらう。柿の木を通り過ぎ、小高い丘にある畑を通り雑木林の中へ入っていく。薄暗い雑木林を一キロほど進むと、突然目の前に桃の畑と美しい樹木林が現れた。

太陽の日差しは木々に遮られていたが時折木漏れ日が健太を照らす。遠くから、う

ぐいすのさえずる声も聞こえてきた。万物すべてが清らかでさわやかな感じがした。老人は桃の畑を通り、少し下り坂を進んでいく。やがて沢に出た。水が透き通っていて、とても冷たい。

両手を合わせ、水を手で掬い口の中に運ぶ。

「おいしいー」

のどを通る時の冷たさが爽快で、老人の家で飲んだ水と同じ味わいがある。

「いいなあー！」

健太は思いつきり叫んだ。沢は幅一メートル弱で、小さな石や大きな石が点在している。

水は健太の左から右へ流れており、上流は左手だ。老人は沢の中へ入り上流へと歩き始めた。ところどころに枯れた樹木が沢を防いでいたが、老人は軽やかに飛び越え上流へと進んでいく。健太もまた老人と同じく軽やかに後をついていく。さわやかさを満喫しながら歩いているうちに、小さい頃の記憶が蘇ってきた。数十センチの石を起し、夢中で友達と沢ガニを獲っている自分。無邪気に今その時

の瞬間を思いつきり生きている。友達同士沢水を掛け合い、服が汚れてもおかまいたしに、とにかく夢中で遊んでいる。迷うこともなく悩むこともなく、今この時を大切に、そして楽しんでいる。

「ああ、今の自分にあの純粹さがあるのだろうか」

最近、何となく周りのせいにして、起った出来事のせいにして、自分に対応出来ないと言っているのではないか。あの少年の頃のようにがむしゃらに集中して全力で生きること忘れてはいないか。ただ時間に流されてはいないか。一度限りの人生、今この時間は自分には二度と来ないのだ。この沢のように流されるのではなく流れていく。自らの意志を持って自分の人生を流れていくのだ。そう思った時、健太の体についていた目に見えない鎧よろいが一つ剥がれ落ちた。

老人はふり返り健太を見たが、何も言わず前を向き、沢をさらに上流に向かつて歩き始めた。

少し行くとだんだん沢の水幅も狭くなり、源流に近づいてきた。老人は、沢から進路を変えて谷を登り始めた。健太は老人の後をついていくが、土は水際のせ

いか湿っぽく、とても滑りやすい。竹などにつかまりながら、上へと登っていく。だんだんと土は硬くなり、大きな木々も見え始めてきた。沢から谷を登り始めて十分ほど過ぎた頃、眼下を見下ろせる中腹の丘に出た。今まで木々の中、沢の中を歩いてきたせい、一気に入りそそぐ太陽の暖かい日差しと眼下に見える山々と盆地、辺り一面の樹木の景色は、健太にとって十分すぎるほどの光景であつた。

「ああ、なんて心が洗われるんだ」

本当に体が自然に溶け込んだ自分。健太はそれを実感した。さまざまな悩みや思いが一気に吹き飛んでしまったような気がした。

（ああ、この太陽、緑色の風景、そして自分。すべてが共生しているのだ。互いにいたわり合い、尊重し合いながら生きている。人間同士もそうしなければならぬのだ）

健太はもう「生きている」それこそがありがたいと感じた。

老人は倒れて枯れている木を指差し、

「ここに座りましょう。少し疲れたかな」

「おじいさん、大丈夫です。このおいしい空気を吸い、緑色の風景を見て太陽の日差しを浴びる。疲れるなんて、そんなことはありませんよ」

「どうです。自分自身がとっても軽くなってきたでしょう。都会には鎧を着た男や女がいっぱいいる。戦国の世でもあるまいに、何を守るために着ているのか。自分に対してもっとと素直になり心をさらけ出せばいいのに。都会の希薄な人間関係の中で、自分の強欲や見栄、傲慢さ、したたかさ等の恥部を隠して生きていくために着ているのか。また、物質・機械文明の象徴たる『お金』を求めるため、他人を潰す道具として着ているのか。

いずれにせよ、初めてあなたに会った時は、他の人よりも体の上にさまざまな鎧を着けて歩いていることに驚きました。さぞや重いだろうと思いましたよ。もしかしたら、このまま鎧に押しつぶされるのではないかと思っただけでした。そこで何とかその着けている鎧を一つひとつ取らせたいと思うて、ここへお連れしたのです。

あなたは桃源郷をご存知かな。夢の世界、俗世間を離れた別天地ですが、昔こ

の辺りは桃源と呼ばれていたそうじゃ。御覧なさい。この見渡す限りの風景は永久に美しい。ただし、本来生まれ持ってきた人間としての心が変わらなければじゃが。あなたは、寝台列車から駅のホームに降り、私と歩きながら坂道を通り、神社を見ながら私の家へ着き、朝食を食べた。そのあと山道を歩き、沢を通り、谷を登ってここへ着きましたな。その間、頭の中でさまざまな葛藤に出合ったことでしょう。あたり前のことを新鮮に感じたり、時には小さな頃の思い出を蘇らせ、今の自分と照らし合わせたりしたでしょう。この不思議な空間は何だろうと最初は思っていますが、やがてそれらを自らの心の中で認めた。それが素直な心なのです。

しかし、最初のあなたは違った。私自身を疑い、疑念を持った目で見た。そうでしょう」

あまりにも見透かされていたことが恥ずかしく、視線を下に向けて目を閉じた。そして、二度三度と深呼吸をしたあと、ありのままの気持ちをぶつけた。

「おじいさん、ごめんなさい。その通りです。自分はセールスをやっているから、

多少のことではだまされるもんかと思いましたし、変な老人だなあなどと詮索もしました。本当にすみませんでした」

「いいんですよ。今の時代、疑念や猜疑心を持つ心が当然になってきておる。だから、もう多くの人々にはこの風景は目に映らないし、見たくても見えないのです。また、感じることもすらできないのです。それが時代の流れなのでしょう。あなた自身、人として生まれ持った素直な心と都会で培った疑念にまみれた心が、自分の中で交錯している時なのです。それは、人間を好きな人だからなのです。あなたは、自社で開発した健康器具を老人に売りつけた。自身の強欲を満たすために。その結果、老人は亡くなってしまった。心の中で懸念していたことが現実に起ってしまったのです。以来、あなたは悩んだ。確かに直接的な死因ではないし、直接的な責任はないけれど、自分の取った行動を悔やんだ。そういうやさしさがあなたにはあるのです。人間としていちばん必要な心が。家族に対しての思い、会社への思い、人間への思い。素直なあなただからこそ、その狭間で悩んでしまう。ただし今は物質・機械文明の中で生きていかなければならない。その中で人間は、

自然とどう共生していくべきなのか、考えなければなりません。あなたの思い悩みは、都会に住む多くの男性や女性の悩みを象徴しているのかも知れない。心の奥底にあるやさしさや思いやりを隠し、顔に仮面を着け、体に鎧を着けて生きているのでしょうか。鏡に映る自分に「そうじゃない」と語りつつも、変えられない矛盾とジレンマを肩に背負い、殺伐とした都会の中で暮らしているのでしょうか。みんな本当は変わりたいんですよ。健太さん、あなた自身もあまり望郷の念にとらわれて現実から逃げるのではなく、今の時代をどう自分として乗り越えていくべきか、そしてあなたの子孫にどう受け継がせるのか、それを考えなければなりません。そういう使命をあなたを含めたすべての人々が、今日^{こんにち}背負っているのです。

まず、今の現実を認めなさい。認めた上で自分は何に夢中になれるのか、何に對して自分は懸命に生きられるのか、また、どうすればより良い人間関係を構築できるのか、考えなさい。

あなたが本気で自分の現実と真正面から向き合った時、初めて本当に生き

ていく喜びが得られるし、社会に対して自分はどんなことができるのか、自然と答えは出てくるでしょう。

いろいろな人々が考え始めることで、いつの日か人間が作り上げた文明と自然とが本当に共生できる時が必ず来る。私はそう信じます。その時にこそ、第二の桃源郷が皆の目の前に見えてくるでしょう」

老人の言葉を聞きながら健太は、はるか先の山々を見渡していた。自然と湧いてくるさらなる強い力があつた。何年と心の中にあつたもやは晴れ、全身が元氣、そんな気分になった。健太は漲る思いを胸に、視線を老人に向けた。しかし、もう老人の姿はそこにはなかった。やがて周りの風景も薄らいでいく。

「おじいさーん、どこに行ってしまったんですか。おじいさあーん……」

ふと気がついた時、寝台列車の中に響きわたる声があつた。

「次は野木駅です。お降りのお客様はご準備ください」

車内に鳴り響くアナウンスが耳の中へと入り込み、ゆっくりと目をさました。

(さっきまでの出来事は、現実ではなく夢だったのか)

放心状態のまま、健太はベッドに座っていた。やがて寝台のカーテンを開け、通路に出る。大きく胸を張り出し深呼吸をし、車内の空気を思いっきり胸の中に入れた。それから降車の準備を始めた。

もう、心の中を覆っていたさまざまな悩みも、やも、きれいに晴れていた。朝つゆに濡れた車窓から見える、緑色の山々に冴える青空のように澄んでいた。

健太は自身に誓った。家に帰ったら、父母に素直な言葉で話そう。

『はくつる』はゆつくりと野木駅に止まった。

ドアが開き、五両目から駅のホームに降りる。

午前七時少し前である。『はくつる』は三十秒ほど停車したのち、動き出した。滑るようにゆつくりと、さらなる北国へ向かって走っていった。

健太は十八年前、誰に見送られることもなく、この駅のホームから一人東京へと旅立った。

果てしなく続く東京までの軌道は、当時の健太にとって時間を超越するのでは

と考えるほど、遠い距離に思えた。されど今、寝台列車『はくつる』は、一晩で遠すぎた故郷に健太を連れてきた。数時間で往来できる距離にはなったけれど、ふたたびこの駅のホームに立つまで、十八年の歳月が流れてしまった。

今はきちんと家庭を持ち、子供を育てる親となっている。少しだけれど、けんか別れた当時の親父の気持ちが変わってきたように思う。

平手を打ってきた時の親父の、俺に対しての愛情がどれほどのものだったのか
が――。

いいわけはやめよう、そう自分に言い聞かせ、駅のホームを駅舎に向かって歩き始めた。

駅舎は、自分が旅立った当時のままで、ホーム越しにそびえる山々の景色もなつかしい。

しかし、以前にはなかった林道が、美しい山並みの木々の間をうねっていた。いくら田舎といえども時間が止まっていたわけではなく、東京と比べればゆつくりだが進んでいるのだろう。

(でも、止まっていてほしい)

自分がつらい時や悲しい時、故郷での楽しい思い出が生きていく勇氣を与えてくれたからだ。

(でも、今日限り望郷の念にとらわれることはやめよう。今この時の現実を見つめ、そこから未来へと歩んでいこう)

健太は昔と変わらぬ駅舎の改札を通り、駅前広場へと出た。はく息は白く空気中へ放射される。

「寒い」

さすがに北国の冬は空気が冷たい。午前七時すぎという時間帯も関係しているのか、肌に突き刺さる寒風だ。広場の路面は凍ってはいなかったが、ところどころに残雪はある。

でも、あと一ヶ月もすればこの北国へも春は訪れるであろう。健太にとってこの空気の冷たさも十八年ぶり。故郷に帰ってきた証なのだ。駅前広場から直線に進む道路幅や、両脇に建ち並ぶ民家の数も十八年前とほとんど変わらない。いい

知れぬ安堵感に包まれる。

「故郷か」

改めてその言葉の重みを噛みしめた。広場には数台のタクシーが停車していたが、乗車せずに歩き始めた。自らの足で一步ずつ地を踏み締め、前に進む。今の自分にとってそれがいちばん大切なことのように思えた。健太は右手に駅のホームから見えた山々を見渡しながら、線路沿いに続くアスファルト道路を一キロほど歩き、やがて踏切に差しかった。東京まで続いている軌道を横切り、駅舎の反対側に渡る。踏切を越えた道路の片隅にも雪は残っていた。足元に気をつけながら実家に向かって寒風の中を歩き続ける。

(ああ、この辺りの風景も全然変わってないや。自分の住んでいた家は、どうなっているんだろう。父や母は元気であるのだろうか)

自然に両親への想いは募る。

(もうすぐ家が見えてくる頃だなあ。あの坂道を登っていけば、自宅が見えてくるはずだ)

多分にわくわくしながら、自然と小走りで進んで行く。駅舎を出て三十分ほどたった頃、健太の目前に我が家が現れた。

実家は、先祖代々農家である。この辺りでは、大きく畑用農地や果樹園を持ち、専業として農業を営んでいた。自宅は農家の家らしく、四方に垣根をまわし、かわら葺きの屋根を配した重みのある邸宅である。

健太は実家の三十メートルくらい手前で立ち止まり、我が家全体を見据えた。胸の高鳴りを止めることはできず、思わず手で押さえ付ける。親父とはけんか別れたまま連絡もせず、意地を張り続けて十八年の月日が流れていた。

健太は玄関前に立ち、ひと呼吸したあと、入口の引戸を右手でゆっくり開けた。「ただいま」

声を発したと同時に、あまりの驚きに二、三步後ずさってしまった。

地面より三十センチほど高い板間の玄関に、仁王立ちした父親の姿を見たのである。心臓に右手を当て胸の高鳴りを押さえながら、玄関前の父親を再度見返した健太は、十八年という歳月の長さをまざまざと感じた。そこには、白髪頭の老

いた父親が無表情のまま立っている。

「お父さん、ただいま」

健太は心から素直に一礼をした。

「お帰り、元気だったか」

朴訥に話す父親の雰囲気は、十八年前とさほど変わってはいなかった。健太の姿を再確認したのか、一人居間の方へ歩いていった。ここの敷居をまたぐのも久しい。複雑な思いが健太の胸に去来する。恥ずかしさと妙な不安を胸に、玄関先で靴を脱ぎ、板間を居間の方へと進んでいく。父親はすでに居間の中央にあるコタツに入っており、居間にやってきた健太を見て、

「元気そうじゃないか」
と言った。

「父さん、十八年もの間親不孝して申しわけございません。何一つ連絡も入れず、本当にすみませんでした。今年で三十八になります。二十八の時、東京で結婚し、その後二人の子供に恵まれました。父さんにとっては孫です」

「そうか、結婚して子供もできていたのか」

父親は感慨深げに、黒ずんだ色の天井を見上げた。

「俺も歳をとってきたよ。もうこの家に戻っていいとは言わない。都会でがんばっているのならそれでもよからう。これからは、年に数度は家族で遊びにくらいいい」

老いた父親を見れば見るほど、連絡を断っていた自分を悔いた。

「父さん、本当にすみませんでした。これからは、父さんの言う通り年に数回は遊びにくるようにしますから。約束します」

父親は卓上に置いてあるハイライトの箱からタバコを一本取り出し、数回煙を吸った。

「ありがとうな。ところで都会の住み心地はどうだね」

「はい——。住むには田舎の方がいいかも知れない。都会は大変です。何か殺伐としていて、ビル谷間を吹く風はいつもどことなくわびしい。すべてがインスタント化されていて、かつ時間に追われる毎日です。どことなくロボットのよう

な機械的な生き方かも知れません。でも、人間はあらゆる状況に対応し、生きてきた唯一の動物です。また、知恵もあります。時代が本当に変わり始めている今、自分はそのことを自分の目で見て、肌で感じ、その環境に対応しながら一歩一歩成長して生きていきたいと思っています。父さん、わがままかも知れませんが、自分の生き方を許してください」

「——わかった。お前もよくここまで自分の考えをきちんと持った。人として成長したじゃないか。父さんは、お前を信じるよ」

「ありがとうございます。ところで父さん、早朝なのに何で自分が玄関前に着いた時、板間に立ってたんですか。びっくりしましたよ」

「ああ、そのことか。毎日の日課としてなあ、仏壇の先祖にごはんとお水を上げ、線香をたいているんだよ。今日も一日平穏無事に過ごせますようにと心から祈り、手を合わせていた。すると、なぜかお前の顔が目に見えちゃった。なんかお前が近くにきているような、そんな胸さわぎを覚えてな。仏壇から離れ、玄関の板間へ行き、まさかそんなことはなからうと思っていた矢先、玄関の引戸が開き、お前が

立っている姿が見えた。正直、口から言葉が出なかったよ。不思議なこともあるもんだなあ」

「そうだったんですか」

偶然とはいえ、親子の不思議な再会のしかたを思い、互いに微笑んだ。

「そうだな、お前がこれから都會でがんばることはよからう。父さんもこれからは応援するよ。できる限りのことはな。ただし、お前がこの家の九代目であることに変わりはないんだ。

今後先祖を敬い生きていくことだけは忘れないでほしい。どんなに環境が変わろうと、どんな時代になっても我々は先祖がいたからこそ、今の自分が存在しているのだ。先祖の道しるべがあったからこそ、今日の生活があるのだ。だからこそ、先祖を敬う心だけは忘れないでほしい、健太。そして、お前の子供達はここの家の十代目だ。——健太、十八年ぶりに帰ってきたんだ。ご先祖様に線香を上げてやってくれ」

「はい、わかりました」

健太は立ち上がり、居間の奥にある仏壇の前に行き、一礼したあと仏壇の前に正座した。線香を二本右手に取ってから左手に持ちかえて、右手でマッチ棒を取り出し、火をつけて目前にある香炉の中にさした。そして、長らく帰ってこなかったことを深くわび、手を合わせ黙とうをした。

一分もたつたであろうか、仏壇の前から立とうと斜め上を向いたその時、先祖の顔写真が飾られてあるのが目にとまった。そして健太は気がついた。右側から三番目と四番目に飾られている夫婦。今から百年ほど前に亡くなったこのご先祖こそ、微笑んだ顔が印象に残る、健太のまぼろしの夢に出てきた老人、そして朝ごはんを作ってくれたおばあさんだった。

だから、なんとなくつかしきを感じたのか。最初は疑いさえかけたこの僕に、妙にやさしくしてくれたあの二人。僕自身の背負っていた重荷から解放してくれたおじいさん、おばあさん、桃源郷で食べた心のこもった朝ごはんをありがとう。今ならきちんとと言える。本当にたくさんのことを教えてくれてありがとうございました。

僕はあなた方の子孫として、きちんとこの世界で頑張って生きていきます。僕の魂には桃源郷での出来事と景色がはつきりと刻まれています。いつの日か、ひいおじいちゃんが望んだ第二の桃源郷を、すべての人々が知恵を結集して必ず作り上げることを信じてください。

健太は自然に流れ出た涙も拭かず、ただ顔写真を見続けている。親父との葛藤、田村順造のこと、そして自分に対しての思い。まさに今、すべての重荷から解放されたのだ。

桃源郷よ、ありがとう。本当にありがとう。

健太がのちに聞いた話では、ひいおじいさんが住んでいた頃、この辺りは川戸村と呼ばれていたということであった。